

不登校経験のある青年の自立**—共働学舎新得農場での“繋がり”による自立—**○中江病院看護部 ^{きん}金 ^{おんれ}玉禮 (会員番号 008905)

キーワード：不登校・人との繋がり・若者の自立

1. 研究目的

本研究は、不登校経験のある青年に焦点をあて、不登校後から現在に至るまでの日常生活、自分自身への評価、周りとの関係性などを記し、彼のとりまく環境を通して社会的自立について考えていくことを目的としている。

厚生省（2015）では、近年の不登校、ニート、ひきこもりなどが社会問題となっていることを指摘し「子ども・若者育成支援法（H21年）」の施行がされている。だが、青年期以降の相談や支援機関などの環境整備が十分にされていると考えにくい。また、不登校後のニート、引きこもりなどの人たちへの支援には、状況改善のための助言・指導、カウンセリング、適応訓練、投薬等が中心となっている。

このようななかで、共働学舎新得農場では、さまざまな障害を持つ人たちが共に働き各々の隠された能力や自らの可能性を見つけられる仕組みづくりに心がけている。ここで、不登校経験のある青年Aの事例を通して、生きる力を得るための“若者の自立”のあり方を模索し論じていくことにする。

2. 研究の視点および方法

社会問題とされている学童期・思春期以降の不登校やひきこもりなどでは、その後の生活に影響を及ぼしている。小・中学校時期の不登校経験から定時制高校、通信制高校などへ進学・卒業し、就職したとしても不登校経験時期からの「対人関係」、「自己肯定感」、「希望をもつこと」などが乏しい場合、社会との接点を持ちつづけて生きていくことが困難となっている場合が少なくない。

本研究事例の青年Aが就労、生活している共働学舎新得農場では、社会通念となっている価値基準ではなく、「個人」の固有の価値を重んじ、お互いに協力することによって引き出される能力を活用している場所である。「不登校経験のある青年A」の就労、生活、人間関係などに着目し、共働学舎新得農場の「青年A」と関係があるメンバー5人に非構造化インタビューした。調査内容は、①共働学舎における「青年A」の生活状況、就労状況、②「青年A」と「B氏」との相互関係、周りとの関係、③「青年A」の中学卒業後時点の状況、現在の状況、④「青年A」の今後の見通し、支援のあり方についてである。調査期間；2014年9月25日～11月30日までの期間で対応した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守する。共働学舎新得農場の頭名での発表については、代表の文章による承諾及びスタッフの了解を得ている。また、調査協力者には、調査の趣旨・データの使用範囲、倫理的配慮に関する事前説明を行い、承諾を得て実施した。

4. 研究結果

共働学舎新得農場においては、社会的弱者といわれている精神障害者、知的障害者、不登校経験者、引きこもり、自殺願望者などが集まり、農業、チーズづくりを中心に共働生活をしている。ここでは、ソーシャルワーカーや専門性をもつ特殊技能を持った人たちで成り立っていない。自分の頭で考え、生活を成り立たせようと自分で出来ることから取り組んでいる。そして、①ひとりひとりの主体性、②意見の尊重、③話し合い、④個々の能力にあった労働が行なわれている。自らの“意志”と“選択”があり、主体となる考えと人を思いやる気持ちを育てている。その結果、「青年 A」は、中学卒業後時期の彼は、“僕はダメな人間だ”と自己肯定感が低く、仕事をしていても“やらされている感”が強くあり、ここでの生活にも希望が持てず、不登校時期と同じようにゲームの世界に没頭し孤独の世界にのめり込んでいた。しかし、実家の a 市の定時制高校に通うなかで共働学舎新得農場のメンバーの「B 氏（薬害による身体障害者）」との繋がりが途切れずに交友関係が続き「援助し合える関係性」が芽生え、“共生”へと変化している。このことから、「青年 A」は、「B 氏（薬害による身体障害者）」への援助が“必要とされている自分”に自己肯定感が養われつつ、さらに仕事への意欲、責任を持った行動へと変化している。このことは、共働学舎新得農場での B 氏との出会い、共働学舎の労働環境やメンバーによって時間をかけながら育まれ、相乗効果によって成長、発展した経過であると考えられる。

5. 考察

一般的な社会的自立とは、一人で生活でき将来的には家族を養うことができること、組織や社会から求められる人材になること、社会との折り合いをつけながら自らの価値観・人生観をしっかりと持ち、それぞれの環境に適応し社会貢献している場合にいえよう。

だが、共働学舎新得農場においては、専門性をもたない自己肯定感が低かった「青年 A」と「B 氏（薬害による身体障害者）」との関係性の共助には、支援する側、される側という概念での関係性でなく、“話し合い”、“個人を認める”、“満たない部分をお互いの能力によって満たし合う”ということや“共に育む”という関係性による「共生」と「自立」が成り立っているように思われる。このことは、彼らの“個々を認めるコミュニティ”が基盤になっているからであろう。このように、彼らのような「繋がりによる自立」から社会的自立の概念を問いなおすきっかけになると考える。